

茶品種育成の現状と展望

茶業技術研究担当 ○高橋 淳、後藤高秋、宮田穂波、加藤俊美
上野将成、戸田秀雄、岡野香苗

1 ねらい

本県の茶品種育成は1947年に始まり、2023年までの77年間で11品種を登録した(表1)。本県は茶産地の中では北に位置しているため、最も重要な育種目標は耐寒性であり、これまで育成した品種はいずれも寒さに強い性質を有している。耐寒性に加え、収量性や早晚性、耐病虫性や製茶品質など様々な形質や特性についても生産者や実需者ニーズをとらえつつ慎重に検討している。そのため、本県の茶育種年数は、他の茶育種実施機関と比較して長い。そこで、本県の茶育種過程を確認しながら育種年数が長くなる理由や育成品種の普及状況、今後の品種登録出願計画を報告する。

2 研究内容

(1) 茶育種過程の概要

本県の茶育種は、①交配、②採種、③育苗、④個体選抜、⑤苗床選抜、⑥栄養系統選抜、⑦有望系統比較、⑧品種登録出願、の8過程を経て品種登録となる(図1)。交配から品種登録までは30年以上を要する。

(2) 茶育種過程の詳細

はじめは、目的の形質をもった茶樹に咲いた花に、他の性質をもった茶樹の花粉をつける。このように年間約3,000花を交配している(①交配)。1年後に約1,500粒の種子が得られる(②採種)。それを2年間温室で育苗し、生育が良い苗や病気に強い苗を約400株選ぶ(③育苗)。選んだ苗を定植し、8~9年かけて寒さに強い個体を約50株選ぶ(④個体選抜)。各株を挿し木で増殖し(増殖した苗群は「系統」と呼ぶ)、1年かけて約25の優良な系統を選ぶ(⑤苗床選抜)。有望系統の苗を定植し、10年かけて耐寒性や栽培特性を調査する。定植5年目以降は製茶も行い製茶品質を確認する。栽培特性・製茶特性ともに優れた1~2の有望系統を選ぶ(⑥栄養系統選抜)。有望系統が合計6系統となったら、1年かけて育苗し、定植後8年かけて最も優れた品種登録候補を1つ選ぶ(⑦有望系統比較)。最終的に選んだ有望系統を品種登録出願すると2~3年で品種登録される(⑧品種登録出願)。

3 今後の見通し(普及の現状と課題)

- (1) ‘ゆめわかば’の延べ栽培面積は県内2.5ha、県外1.7haで7都府県に普及している。‘おくはるか’の延べ栽培面積は県内13.0ha、県外14.5haで22都府県に普及している(表2)。「さやまあかり」の延べ栽培面積は県内8.4ha、県外0.7haで6都府県に普及している。
- (2) 1~2年後にドリンク茶にも適した煎茶用品種を品種登録出願予定である。また約12年後にはアミノ酸含有量が高い高品質多収品種、約20年後には極早生品種の出願が期待される。

表1 埼玉県育成11品種の早晩性

極早生 ~-8	早生 -7~-5	やや早生 -4~-2	中生 -1~+1	やや晩生 +2~+4	晩生 +5~+7	極晩生 +8~
			(やぶきた)			
		さやまかおり	ふくみどり	とよか		おくむさし
		さいのみどり	ゆめわかば	さやまみどり		おくはるか
			さやまあかり	ほくめい		
				むさしかおり		

早晩性は、「やぶきた」を0（基準）としたときの埼玉県の摘採期

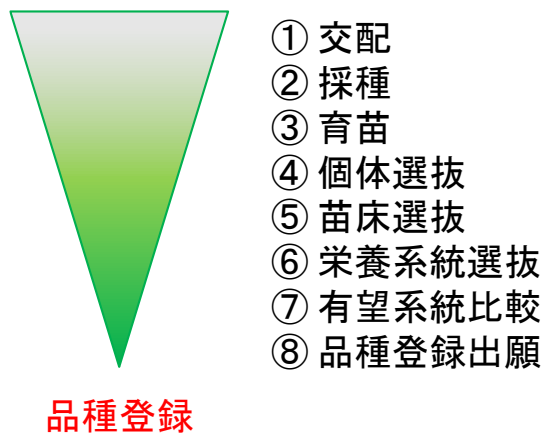


図1 本県茶育種過程

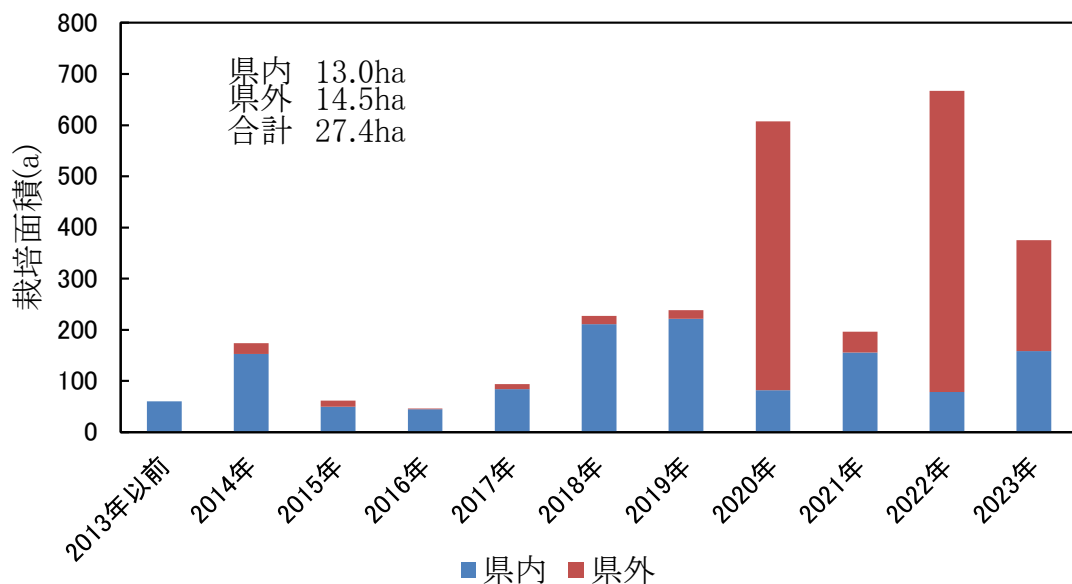


図2 ‘おくはるか’年別新植面積
苗木2,000本/10aで算出